テニスして

歩牛生

ほの熱く照した太陽は、微風に流されてゐる白い雲に被はれて見ねなくなつた、そしていつまでも出て來なかつた。後は涼しく氣持よい運動日和になつた。僕はS君と庭球を始めた。日も照らさぬ靜な庭に深い綠の香りを受けながら白いラインを左りに右に、ポン〳〵〳〵ラケットを振廻すことはなんと爽快な極みであらう。僕等は下手だ。よいサーブもスマッシングも出來ない。一度見舞つた球は再び歸つて來ない。然し僕等は愉快だつた。眞劍だつた。手と足と、そして身体全体をあぶなげに曲げながら白いラインに注意してあの小いちやな球に全身の力と精神をこめて打つのであつた。然し々々無慘や！その球はネットに妨げられた、又ラインを越ねては向ふへ飛んで行つた。僕等はどんなにかそのネットを恨むだであらう、ボールの飛むで行く方を見てはラインの狹い事をかこつたぞらう。然し僕等は屈しなかつた。そうすればする程力は以前に倍して運動は續けられた。今や僕等は庭球することより他には何ものもなかつた。そこには勝負の見苦しさは微塵もなかつた。僕等のテニスすること、それは本當に清らかな純なるものであつた。彼の古のギリシヤのモットーであつた「健全なる

肉体に健全なる精神が宿る」とは又我々のそれでもあつたから。

人々は嘲つた。それでも僕等は止めなかつた。力の續く限り。やがて疲れた身体を深い綠の下に横たへ流れ行く雲を望めながら「身延の山は千早振る」と聲高く歌つた。空飛ぶ小鳥も我が歌に和して囀へづる樣だつた。

おゝ愉快！　愉快！

我等は自然の子

自然のひざに

自由に遊び

自由に延びる

本當に幸福だ